

シリーズ「遺跡を学ぶ」

134

装飾古墳と 海の交流

虎塚古墳・十五郎 穴横穴墓群

稲田健一

新泉社



装飾古墳と

海の流れ

― 虎塚古墳・

十五郎穴横穴墓群 ―

稲田健一

【目次】

第1章 虎塚古墳をさぐる	4
--------------	---

1 壁画との出会い	4
-----------	---

2 虎塚古墳の発掘調査	7
-------------	---

3 少ない石室内の出土遺物	16
---------------	----

4 地域からみた虎塚古墳	19
--------------	----

第2章 虎塚古墳の壁画をさぐる	28
-----------------	----

1 壁画の図像	28
---------	----

2 常陸の装飾古墳の特徴	35
--------------	----

第3章 十五郎穴横穴墓群をさぐる	42
------------------	----

1 未開口横穴墓の発見	42
-------------	----

2 十五郎穴の発掘調査	44
-------------	----

3 東日本最大級の横穴墓群	48
---------------	----

4 構造・儀礼・副葬品	54
-------------	----

5 横穴墓の再利用	61
-----------	----

6 古墳と横穴墓の関係	64
-------------	----

第4章 海でつながる文化	66
--------------	----

1 那珂川下流域の古墳	66
-------------	----

2 太平洋岸の石棺墓	71
------------	----

3 海でつながる古墳時代の文化	78
-----------------	----

4 古墳時代から古代へ	86
-------------	----

5 地元の宝・虎塚古墳と十五郎穴	91
------------------	----

参考文献	92
------	----

編集委員

勅使河原彰（代表）

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

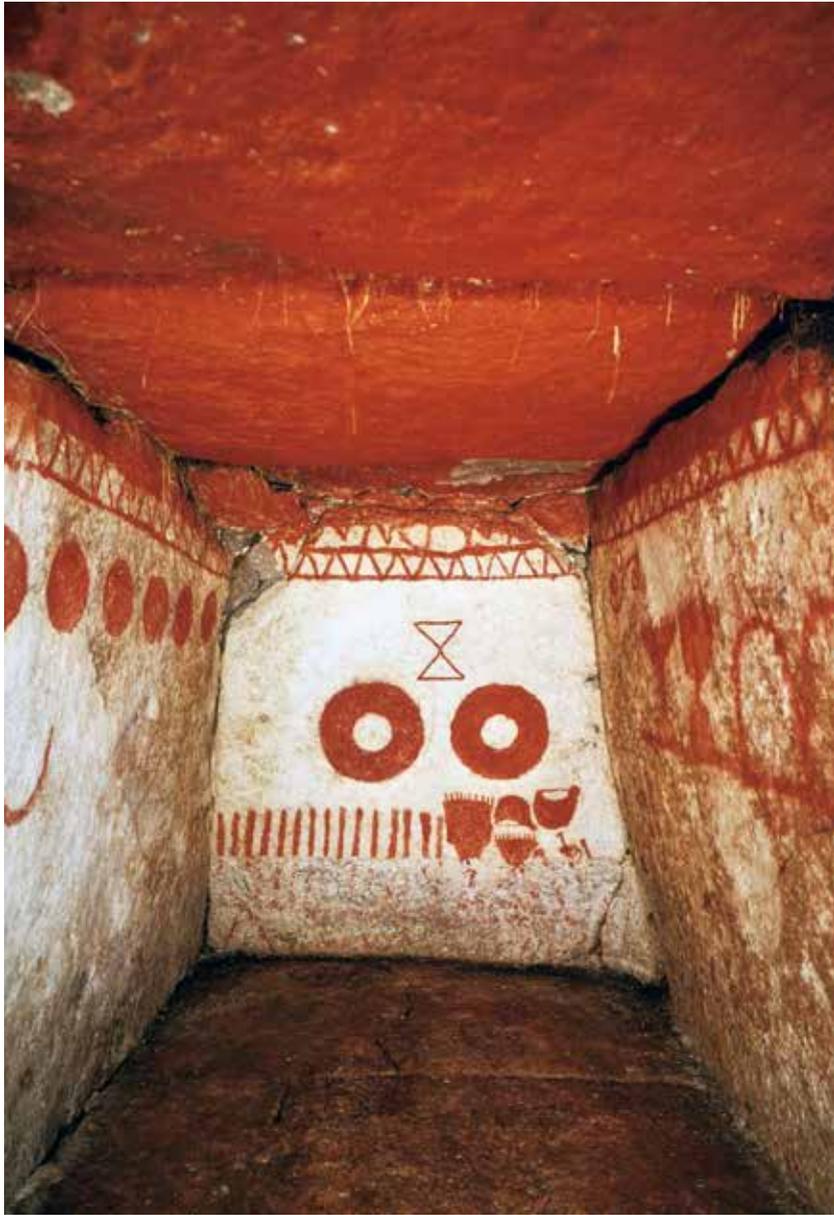


図1 ● 虎塚古墳の壁画
東日本を代表する装飾古墳。見学すると真っ先に奥壁の2つの環状文が眼に入ってくる。

第1章 虎塚古墳をさぐる

1 壁画との出会い

虎塚古墳の壁画発見

一九七三年九月一二日、虎塚古墳の石室入口の閉塞石が一四〇〇年ぶりに外されることになった。当時の調査日誌には、つぎのように記されている。

「午前一〇時から石室扉が調査団によって予告されていたために、多数の市民が見学に訪れる。市民および報道関係者の見守る中で、午前一〇時に扉作業に入る。扉石はすっぽりと玄門に納まっているために、作業は思うようにはかどらない。

一〇時五〇分、玄門開く。先頭の調査員より「壁画だ！」の第一声。大塚初重団長より、つめかけた市民にまず壁画発見の報告がある。静寂は東中根台地に大ききなどよめきと拍手がおこる。壁画発見は勝田（当時）市民を興奮のるつぼと化し、見学者の列あたとをたたず。現場は、

かなりの興奮状態となる」予測していなかった壁画の発見だ。一週間後の九月一日、緊急の現地説明会が開催され、約一万二千人の見学者が訪れた。見学者のなかに私はいなかった。当時四歳ではしかたがない。

壁画の虜に

壁画発見から七年後の一九八〇年、虎塚古墳を目指して祖母につれられて芋畑のなかの道を歩いていく小学五年生の私があった。虎塚古墳には立派な公開施設が完成していた。今日はその一般公開日。銀行の金庫のような厚い鉄の



図2 ● 整備された現在の虎塚古墳
写真手前が前方部で、奥が石室のある後円部。
前方後円墳という墳丘がきれいに残っている。

扉を開け、薄暗い部屋に案内される。

電気が消されると、目の前のガラス越しに、鮮やかな赤色の文様が浮かびあがった。一瞬にして、その文様の虜とりことなった。虎塚古墳の壁画との出会いである。その出会いが私の人生を決めたといってもよい。現在私は、その虎塚古墳のすぐ隣、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターで仕事をしている。

虎塚古墳の壁画の謎を解きたい！ 小学五年生のときに思った目標だが、現在も答えがみつけられず、もがいている。本書に記すことは、そのもがきのなかでみつけた答えの断片である。

2 虎塚古墳の発掘調査

発掘調査のはじまり

虎塚古墳は、茨城県ひたちなか市、太平洋に注ぐ那珂川河口なかがわから直線距離で約四キロの標高約二〇メートルの台地上にある（図3）。

虎塚古墳の存在は地元では昔から知られていたが、山林のままで樹木が繁茂していたため、古墳の実態は不明だった。

それが一九七三年、当時進められていた勝田市（那珂湊市と合併して、現・ひたちなか市）の市史編纂事業の一環として、地域の古墳時代後期の様相を明らかにするために、虎塚古墳を発掘調査することになったのである。加えて、調査前年の一九七二年に、奈良県明日香村で高

調査の結果、外気温が約三二度あるのに対し、石室内は
この時点で、東文研が石室内の環境調査を実施している。
調査の結果、外気温が約三二度あるのに対し、石室内は
かなりの石が閉塞のために積まれた状態であった(図5)。
存在を確認した(図4)。入口となる羨道部には、人頭大
がはじまった。後円部南側のトレンチ調査で横穴式石室の
測量調査が終了した八月二二日から埋葬施設の確認作業
以降の前方後円墳であることが推測できた。

測量の結果、墳丘の全長五六・五メートル、高さ七・五メ
ートルの前方後円墳であることが判明した。墳丘に葺石や
埴輪の樹立はないことから、古墳時代でも後期、六世紀末
まづ墳丘をおおっていた樹木を伐採し、墳丘の全貌を一望
できる状態にした。
最初の発掘調査は一九七三年八月一六日から開始された。

松塚古墳の壁画が発見され、その壁画の保存にいかなる条
件を必要とするのかを検討していた東京国立文化財研究
所(東文研)が、未開口石室の調査事例を探していたとこ
ろ、虎塚古墳がその候補にあがり、未開口石室の温度や湿
度、空気組成などのデータを得ることも目的となった。



図5 ●羨道部に積まれた人頭大の石
奥に赤色に塗られた玄門の
上部がみえる。



図4 ●1973年の石室の調査風景
明治大学の学生が中心となって調査した。
写真中央奥に石室がある。

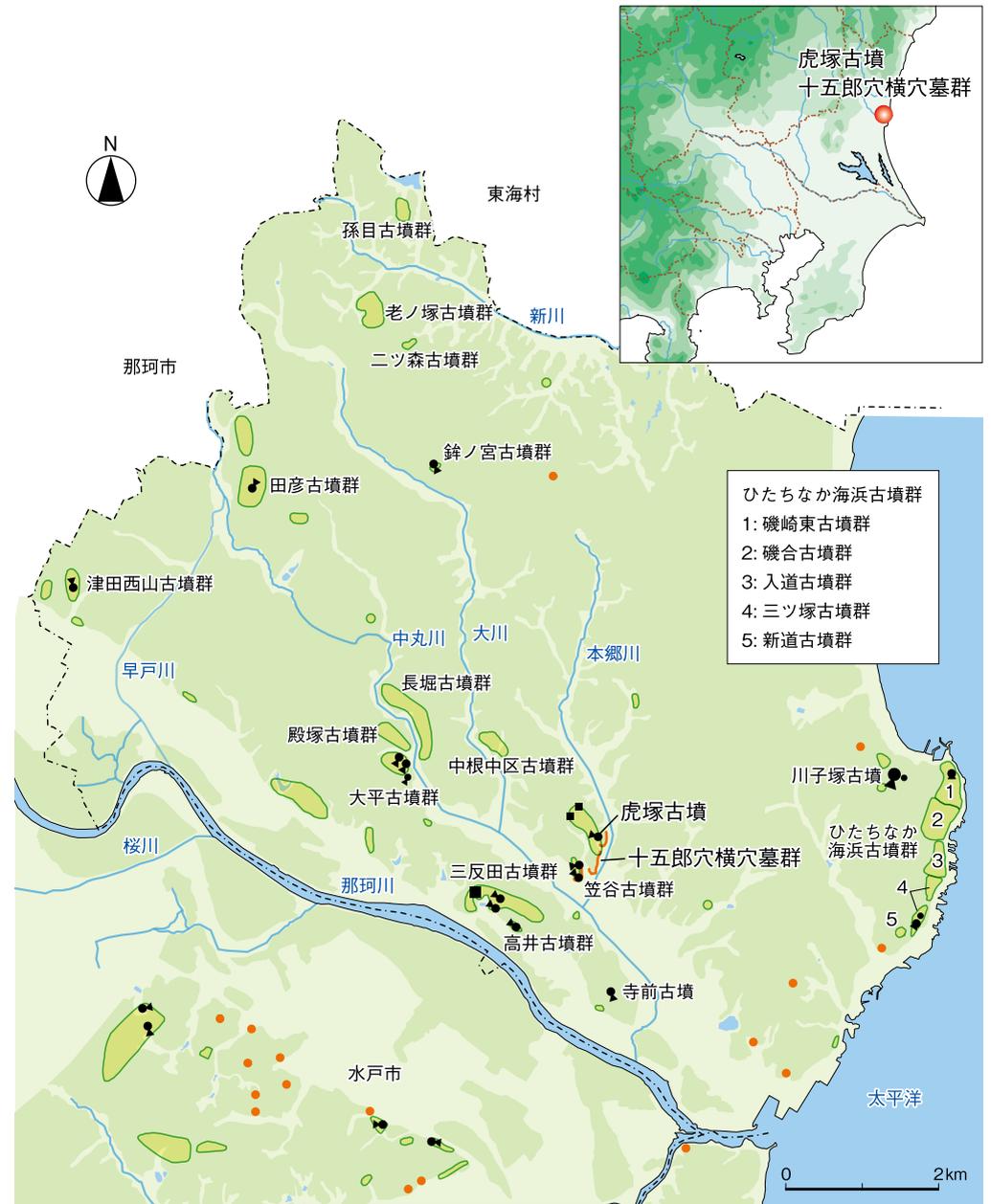


図3 ●虎塚古墳と那珂川下流域の古墳
古墳是那珂川とその支流、海岸部に多く分布する。

8)。奥壁の位置は、後円部の中心から南に約四メートルのところになる。石室の主軸は北から東に一五度傾いており、開口部は南南西の方向になる。

横からみると、玄室の天井石の内側が後円部墳頂部より約四・六メートル下になる。石室は地山を掘り下

石室

石室は後円部にある(図

虎塚古墳の周溝は、北側と南側とで形状を異にするきわめて類例の少ない形だ。墳丘北側では外堤がほぼ一直線で「盾形」なのに対して、墳丘南側では外堤が墳丘に沿った「瓢形」をしている。また、周溝内に二カ所の陸橋状遺構をもつことも特徴である。前方部の北西隅と墳丘南側のくびれ部からやや前方部に寄ったところにある。周溝を含めた主軸全長は六三・五メートルである。

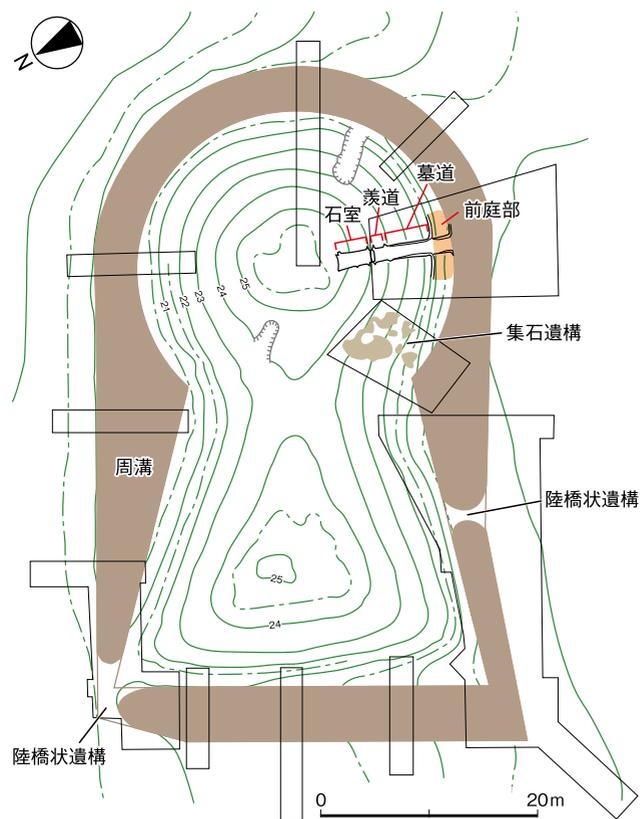


図7・虎塚古墳の実測図

墳丘全長56.5mの前方後円墳で、後円部径32.5m、前方部前端幅38.5m、後円部高さ7.5m、前方部高さ7.2m、周溝を含めた全長63.5m。石室西側には集石遺構がある。

墳丘

虎塚古墳は前方後円墳である。前方部は北西を向いている。先ほども触れたように、主軸全長は五六・五メートル、高さは周溝底面から後円部で七・五メートル(図7)。



図6・1400年ぶりに開けられた石室の内部

床面中央に遺骸があるが、骨の残りがわるく、粉状になっていた。

一五度、湿度は九〇パーセント、炭酸ガス濃度は外気の五〇倍という結果を得た。この調査時点で、虎塚古墳に壁画があることはわかっていない。あくまでも高松塚古墳の壁画の保存のための調査であった。

その後、羨道部を調査し、玄門を閉塞していた板石をとりのぞくと、そこに予測していなかった壁画が発見された顛末については先に触れたとおりである(図6)。

このとき高松塚古墳の壁画のために得たデータが、結果的には虎塚古墳の壁画の保存に大いに役立つこととなる。

虎塚古墳は当時、発掘調査で確認されたはじめての装飾古墳であるとともに、未開口の石室内の環境データを明らかにしたはじめての古墳でもあるのだ。

では、発掘調査でわかった虎塚古墳の概要を整理してみよう。

石室の閉塞には、一枚の凝灰岩の板石と礫を用いていた。板石は高さ約一・二メートル、幅約一・二メートル、下で幅一・二メートルの台形状をしていて、厚さは約二〇センチ。柱石と楣石に柄を切つてはめこんである。板石が安定する工夫である。閉塞に積み上げられていた礫は、中段から下段は三〇〜六〇センチほどの大形のもので、上段は一〇〜三〇センチほどの小形のものであった。

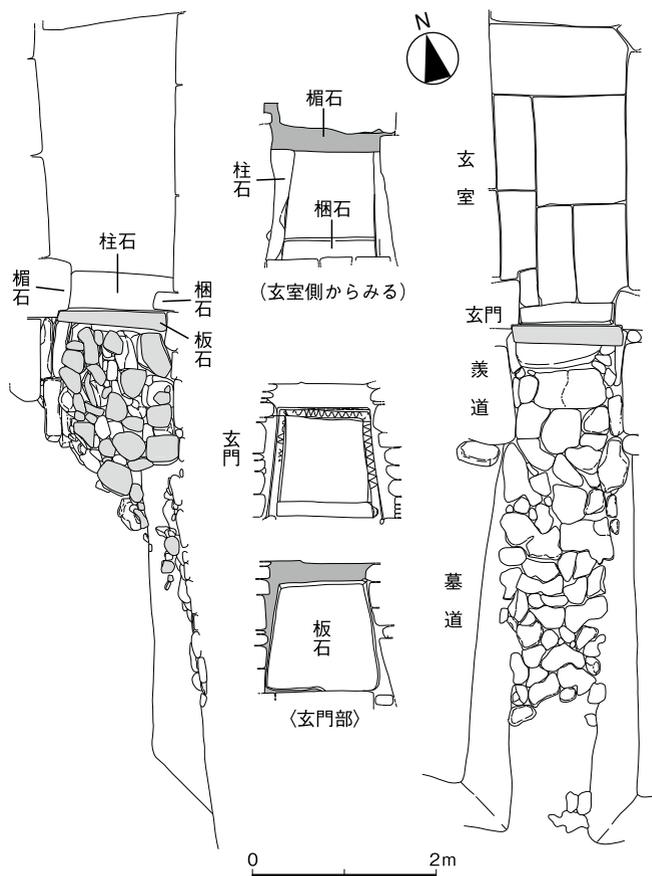


図9 ● 石室の構造
両袖玄門付の横穴式石室である。墓道の長さ約4.2m、幅約0.85m。羨道部の長さ約1.3m、幅約1.2m。石室の長さ約3m、最大幅約1.5m、最大高約1.5m。

室側壁上部をL字状に切り込んで架けわたす構造で、この構造は栃木県地域からの影響を受けた可能性がある。

墓道に続く羨道部は、長さ約一・三メートル、幅約一・二メートル。東壁・西壁ともに三段に中小の切石が積まれている。天井石は一枚のみで、長さが約一メートルと羨道部を完全にはおっていない。床面には敷石があるが、墓道の敷石とは異なり比較的大きく、一面も整っている。羨道部と玄室を区分する玄門部は、玄室東西の側壁より突出した柱石と、その柱石のあいだの上に架構された楣石まがひし、そして柱石のあいだの下に置かれた楣石まがひしで構成されている。楣石は玄

室石材は凝灰岩。この凝灰岩は虎塚古墳のある台地を構成している層の一つである。石室の構造は両袖玄門付の横穴式石室(図9)。奥壁から墓道入口まで約九・五メートルある。外側から順にみていくと、まず墓道は、後円部墳裾のテラス状の平坦面に続いて、長さ約四・二メートル、幅約〇・八五メートルあり、羨道部に接続している。墓道の敷石は、墓道先端から中ほどまではないが、その後は羨道まで隙間なく敷かれている。石材は石室石材と同じ凝灰岩である。

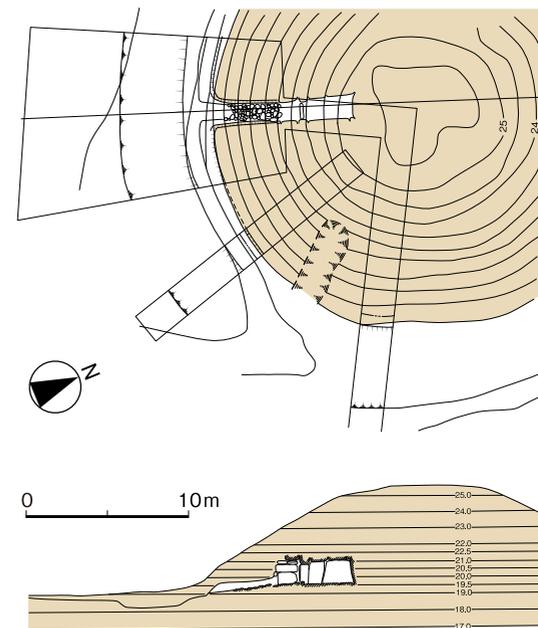


図8 ● 石室の位置
後円部にあり、南側に開口している。地山を掘り下げて構築している。石室奥壁の位置は後円部の中心ではなく、南側に寄っている。

玄室は一枚の奥壁と二枚の板石からなる西壁および一枚の板石からなる東壁、それをおおう三枚の天井石で構成されている。床面には七枚の切石が敷かれている。規模は、長さ約三メートル、最大幅約一・五メートル、最大高約一・五メートルである。

側壁は奥壁をはさんでいるため、垂直ではなく、奥壁の形状に合わせて玄室内側に傾けてある。このような石室は「切石台形組石室」とよばれ、常陸中央部から北部の横穴式石室に特徴的にみることのできる構造である。当石室でもっとも大きな石材は東壁の一枚石で、長さは最大約二・八メートルある。

前庭部礫群と集石遺構

さて、墳丘の外側にまた戻ると、墓道の入口付近から幅一メートルばかりの一段のテラス状遺構を経て周溝へ落ちる緩傾斜面を前庭部とよんでいる。

この緩傾斜面に東西二群の礫群がみつかっている(図10)。石室墓道の東西対称に配置されていることから、意識的に置かれたものと考えることができる。石材は石室や閉塞石と同じ凝灰岩である。

礫群の範囲は、西側が七〇〜一二〇センチの楕円形で、一部礫が重なっており、厚さは約三



図10 ●前庭部

写真中央に石室に続く墓道がのび、閉塞のための石が積まれている。墓道先端部の両側に礫群が存在する。

〇センチある。東側は樹木の根による攪乱をうけ、原形をほとんどとどめていない。礫の下には、二〇センチほどの土が堆積していることから、礫群を配置したのは石室を構築したときではなく、古墳の完成後、墳丘にある程度の土が自然に堆積した後のことと考えられている。

石室西側の墳丘くびれ部では、集石遺構がみつかっている(図7参照)。南北約七メートル、東西約七メートルの範囲に広がっているが、推定では、この集石遺構は石室近くまで広がっていると考えられる。つまり、墳丘築造以前の旧地表面に構築されているわけだ。

集石遺構の石はすべて凝灰岩で、風化が著しく地点によつては粉状となっている。集石からはガラス小玉の半欠が一点出土したのみである。集石遺構の直上には、土師器と灰・焼土・木炭を含む黒褐色土が堆積していることから、この遺構が石室構築とかかわりのある一種の作業場とする見方と、石室構築に際しての地鎮祭的な性格の古墳祭祀の場所ではないかという二つの見方がある。

私は、以下に記す古墳研究者の小森哲也氏の指摘する例から、集石遺構を石室構築時の儀礼の場と考える。一つは、出雲の古墳や熊本県氷川町の岩立C号墳では、石室がみえている段階で葬送儀礼をおこなったと思われる例があること。もう一つは、栃木県下野市の山王塚古墳で、墳丘盛土前に凝灰岩の粉を旧地表面の全面に敷き詰める例があり、これを墳丘基盤上の儀礼ではないかとしていることである。

以上のように、前庭部の礫群は虎塚古墳での追葬を考えるうえで重要な遺構で、集石遺構は石室構築時の儀礼を考えるうえで重要な遺構といえる。

3 少ない石室内の出土遺物

石室内から出土した遺物

遺物は石室内外から出土しているが、石室内の数は少ない(図11)。

石室内から出土した遺物は、一体の成人男性の人骨と、大刀一口、刀子一口、毛抜形鉄器一点、鉄鏃一点、槍鉋一点、透かしのある鉄片一点(図12)。古墳の副葬品としては種類・量ともに貧相といえる。

ただし大刀は、外装の残存状況がきわめて良好なものだ。遺骸の胸部から腹部にかけて置かれていた。把頭部の一部が欠失し鞆尻金具が遊離しているが推定長は三八センチ。

把頭部には銀製の紐通し環がみられる。把部は、把頭側に銅製の責金具、鞆口側に銀

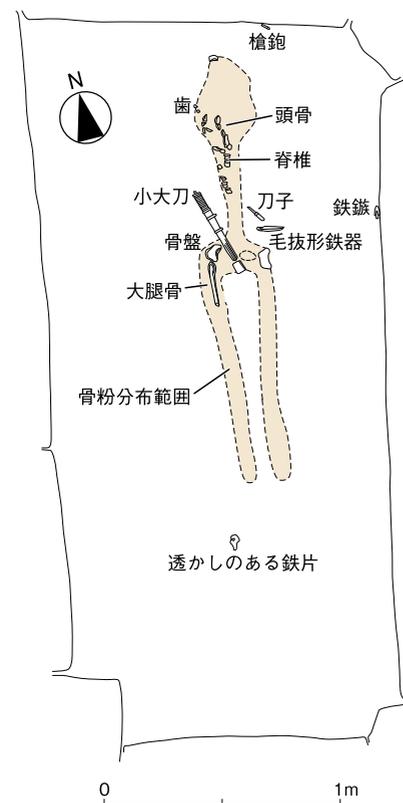


図11 ●石室内に残る遺骸と副葬品の配置

人骨はほとんどが粉状になっていた。背骨と両足の骨がかすかにみえる。遺物は少ない。大刀は遺骸の胸部から腹部にかけて置かれていた。



製のやや太めの責金具があり、そのあいだは木質の上に紐が巻きつけてある。さらに、把部全体に黒漆が塗られていた痕跡が確認できる。鞆部は、銀製の鞆口金具と二つの吊金具が装着されており、把部と同様に木質の上には黒漆と思われるものが付着している。遊離している鞆尻金具は、銀製の責金具のうえに鉄製の鞆尻金具をかぶせるようにしているのがわかる。

このような観察から、この大刀は、全体に黒漆が塗られ、金具が銀色に輝く豪華な大刀であったことが想像できる。

石室外から出土した遺物

石室外から出土した遺物は、鉄鏃一点、小型の環を連れた鉄製環二点、両頭金具二点、鉄釘一点、鉄鏃三七片、不明鉄製品一点で、石室内の副葬品より数が豊富で、墳丘規模相応の内容である。

鉄鏃は推定全長一八センチ。身の三分の一ほどからは袋に作られ柄が挿入されるようになっており、木質の一部が残存している。両頭金具は弓に付ける金具。

鉄鏃の鏃身部の形態は、長三角形と腸扶のある長三角形、腸扶類五角形、片刃、雁股がある(図13)。このなかで雁股鏃は常陸



図12 ●石室内から出土した遺物

上段は大刀(長さ38cm)、中段は刀子、下段は右から槍鉋、毛抜形鉄器、鉄鏃、透かしのある鉄片。

で出土例が少なく注目される。これらの鉄鏃は、七世紀前葉ごろの時期のものと比定できる。

これら石室外から出土した遺物は、当初石室内にあった可能性が高い。したがって、両頭金具からは石室内に弓があったことが、木質の残る鉄釘からは木棺があったことが推測できる。

またこれらの鉄製品のほかに、墓道と墓道西側の集石遺構から土師器が、前方部墳頂から斜面部では須恵器の大甕と平瓶の破片が出土している。

以上の出土した遺物から、虎塚古墳は七世紀初頭に築造と初葬がおこなわれたと推定できる。そして追葬がおこなわれたことがわかったが、石室内から出土した遺物の時期は七世紀前半としか推定できず、追葬時期を確定することは難しい。

追葬がおこなわれた際に死者を納めた棺ごと副葬品が石室外へ持ち出されたものと考えるが、この状況について、通常の追葬では考えられない状況だと元国士舘大学の井博幸氏は指摘する。つまり、この状況から先葬者と追葬者のあいだに血縁的・系譜的関係はないとみなし、追葬者によって墓は乗っ取られた可能性が高いと推断しているのである。この指摘は、石室内に文様が描かれたのが石室構築時なのか追葬時なのかという疑問と深く関係しており、虎塚古墳を考えるうえで重要な指摘である。

4 地域からみた虎塚古墳

虎塚古墳群第四号墳と第五号墳

近年、虎塚古墳周辺で多くの調査を実施し、虎塚古墳を考えるうえで重要な成果を得ている。また、墳形や石室を対象とした研究も進んでいる。ここでは、これら最新の調査や研究をもとに、地域から虎塚古墳の特徴を考えてみたい。

虎塚古墳群第四号墳（虎塚四号墳）は、虎塚古墳から北へ約四〇〇メートルの場所にある。墳丘は昭和初期の土取によって失われ、現在は巨石の石室がむきだしの状態となっていることから、「茨城の石舞台古墳」とよぶ人もいる（図14）。

一九八七年の調査により周溝が確認され、方墳であることが判明した。

埋葬施設は、凝灰岩の切石を用いた半地下式の単室構造の横穴式石室である。石室がむきだしとなっているため、石室を外側からみることはできるが、内側は天井石が羨道側にズレ落ちて入口を塞ぎ、土が堆積しているため観察することはできない。

過去の調査から、石室の奥壁・左右側壁・天井石・床石それ



図14 ●虎塚4号墳の石室
周溝外周で約31mの方墳。石室の規模は内側で奥行き2.2m、幅1.9m、高さは推定で1.5m。

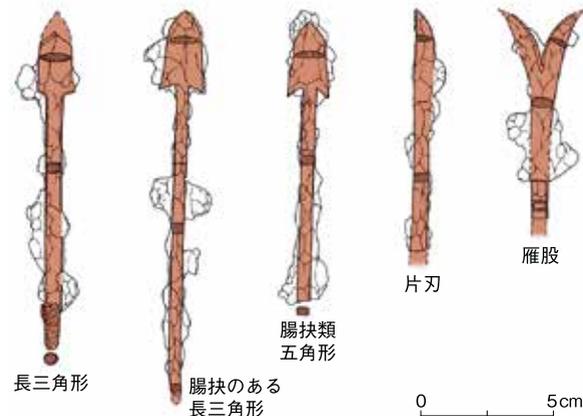


図13 ●石室外から出土した鉄鏃
出土した鉄鏃は5つに分類できる。雁股鏃は1点のみ。